

---

# 再生能力者は岩をも碎く

サラシナショウマ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

再生能力者は岩をも碎く

### 【Zコード】

Z3373BA

### 【作者名】

サラシナショウマ

### 【あらすじ】

『街一個分破壊』。『両手で数えるどころか、想像する事すらできないような数の人が死んだ』。そんな台紙が新聞を埋めつくしていた十年前。無差別爆破事件と名づけられた謎の事件は多くの人々の命奪つていった。だが、それによつてもたらされたものは何も負だけではなかつた。突如爆破事件の生き残りに訪れた異常。皮膚の硬化や、炎を吐くなど“超能力”と呼ぶにふさわしいそれを、人は“ウイレース”と呼んだ。

そして爆破事件から10年後の世界。

“再生”の能力を携えた生き残りの一人である青年、再興要はワイ  
レース専用の警察を育て上げる事を目的とした学園、通称ウイレー  
ス対策学園のたつた一人の学園平和委員として過ごしていた。

## プロローグ

10年前の大爆発。

将来の夢と聞かれれば、野球選手と答えていたほどに幼かつた僕の最後の記憶は、そこで途切れている。今でも夢ではないかと思える程に非日常な光景であつたそれは、当時大事件として連日ニュースを騒がせていたらしい。

『街一個分破壊』。『両手で数えるどころか、想像する事すらできないような数の人が死んだ』

そんな台紙が新聞を埋めつくしていた。

しかし、その事件の規模に反して、想像される犯人像はあまりにも小さすぎた。個人への恨みの代償として行動したわけではない、無差別もいいところであるその爆破事件。

まさに手も足も出ないという言葉がぴったりな状況に、当時の警察は仕方なく未解決と言う印を押した。

これが、僕が体験した“無差別爆破事件”的真相である。

と、ここまでが“日常”的結論。そしてここからが、“非日常”的結論。

実際には減ったものと、増えた物。2つの対極的なものが比例するかのように発生していた。

減ったものは街と人。そして、増えたものはある“異常現象”。ある被害者は治療の為に撃たれた注射針を通さない程に皮膚を硬化させた。またある被害者はサーカスなどで見る曲芸と同じように、口から異常なほどの炎を吹き出した。それは僕も含めて、“事件の被害者全員”的の身に起きていた事で、何と言つかまさに怪現象と呼ぶのが正しい光景だった。そして、世間一般の人はそれを「特殊能力」と呼んでいた。

時は無差別爆破事件の10年後へと、進む

。

## プロローグ（後書き）

閲覧ありがとうございます。

まだ序盤も序盤ですが、末永く付き合つていただけると幸いです。

## 【1】 たつた一人の平和委員

平和と言つ言葉がどこまでも似合ひ重下がり。ある一人の男の声が、辺りに響き渡つていた。

「……逃がしてくれよ、『平和委員長』。お前も同じ『ウイレース』なら分かんだろ？ それとも何か？ お前はウイレースの中でも優秀能力者だから、俺みたいな屑は仲間じゃないつてか？」

そう言つた青年は、彼の上下黒のラフな格好とは対極的な真っ白な袋を持ち、中からはきらきら光る何かが顔をのぞかせていた。

「同じだからこそ取り締まらなきやいけないんだよ、お前みたいな『ウイレース』を宝石泥棒なんかに使う馬鹿を。それが僕の役目だから」

「……違ひねえ。同じウイレースだとしたつて犯罪者と警察官は対極の存在だからなあ」

そう言つて、青年が手に持つた銃を白一色で統一された厚手の制服を身にまとう青年へと向けた。青年の顔には不気味な笑みが浮かんでおり、誰が見てもどこかおかしいのだと感じるには十分だ。対して銃を向けられた、制服を纏う青年は両手を上げ面倒くさそうにつぶやく。

「能力者であるお前がそんな銃に頼るつてことは、防護系のウイレース……つて事か。おい、さつさとそれをしまえ。罪が重くなるぞ」

「うるせえよ。てめえがどんな能力者か知らねえが銃で撃てば大抵わかるつてもんだ。どんな奴でも避ける為に能力を使うから……なあ！」

直後轟音が響き、銃を持つ彼の手が反動によつて後ろへ下がつた。小さな塊が確かに大きな力を持つて飛来する。数秒もしないうちに弾は制服の青年の頭を打ち抜くだろう。

それを避ける為に制服の青年はウイレースを晒す。 そう、銃

を打つた青年は思つてはいたのだが。

「……ツ！」

嫌な表情を浮かべたのは制服の青年ではなく、銃を売った青年まさしくその人だつた。

彼が驚愕の症状を浮かべ見つめる視線の先にあたのは、なんらかのウイレースを使い銃をはじくだろうと予想された制服の青年の、頬に大きな穴が開いた姿。先程と変わらないつまらなそうな瞳を変えずに、ただただ何事もなかつたかのように言葉を紡ぐ。

「……銃を撃つた後に震えるなよ。殺すつて言つ明確な意思があつたから、迷わずに打つたんだろう？だから……俺の頬に穴が開いているんだろう？」

血を止めようとせずに制服の青年は言つた。いつしか頬を流れる血液が純白の制服へと染みこみ、なんとも歪な彩色を醸し出している。

「い、いや……。違うんだ。本当に殺すつもりなんてなかつたんだよ！ ただ……ただ俺は脅しのつもりで……」

「大丈夫だ。お前は殺してなんかいない」

「……え？」

銃を持つ青年の呆けた声をそこに残して、制服の青年はそつと右手を天に掲げた。偶然なのか必然なのか、曇りがちだつた空に少しだけ太陽が顔を出した。

手を掲げたままの制服の青年が諭すように囁く。

「……知りたかったみたいだから教えてやるよ。僕の能力は……これだ」

そう言つと彼の掲げた手がゆらゆらと揺らめき始めた。

それは砂漠で旅人を惑わす幻影のようで、思わずその様に銃を持つ青年が集中していると、ゆっくりと。それはゆっくりと緑色の炎

が灯り始めた。

別にマッチを使ったわけではない、比喩表現でもない。実際に彼の手は独りでに燃え始めたのだ。

酸素の助けを最大限に受けた激しく燃え盛る紅の炎とは違う類の、優しく見る者の精神を落ち着けさせるかのような、そんな炎。彼はそれを一度だけ見ると、ゆっくりと頬、つまり弾で穴が開いた場所へと持つて行つた。

熱さを感じないのか、制服の青年の顔が歪む事はない。  
と、ここで銃を持つ青年の目が大きく見開いた。

制服の青年の傷が、ゆっくりとではあるが少しづつ、修復され始めたのだ。

嫌らしくべたついていた血液はいつしか消え、丸の形に分かれていた傷口さえもが一つに戻ろうと移動し始める。その様子は服のほつれを糸と針で塗つてているかのようで、何とも奇妙な光景であった。

「……！ つと。へへつ、そういう事か」

しばらく口を大きく開けていた銃を持つ青年は、正気を取り戻すために勢いよく首を振ると言葉の続きを紡ぎ始める。

「てめえのウイレースは“治癒”ってわけか」

「……」

何も答えない。彼の発言は確かに聞こえているはずに、傷を完ぺきに修復した青年は沈黙を貫く。銃を持った青年はそれに構わずには語り続けた。

「つたぐ、、脅かすんじゃねえよ。殺したかと思つたじゃねえかよ。……だが」

そう言つと青年は銃を捨てた。玩具に飽きた子供のようにあつけなく、必要ないとでも言わんばかりの未練のなさで凶器と呼べる一つの攻撃手段を投げ捨てたのだ。

「てめえが治癒のウイレースだつてなら銃なんていらねえよ。こんなじや傷つけるだけで直ぐ直されちまつからなあ。そんな事をする前に……」

男は語りながら右手と左手に力を込めた。

男の右腕が肥大する。

「俺の……」

男の左腕が肥大する。

「ウイレースで……！」

男の右腕が、左腕が、右足が左足が首が。そのすべてが二倍以上はあろうかと言う程に肥大し大地を蹴り上げた。いくつかのコンクリートの破片が後ろへ飛び、そのまま肥大した男は制服の青年へと走り出した。

「治癒なんて意思が働く前にお前を氣絶させる……！ その後でぶん殴つてやるよ！」

その体格に似合わず俊敏な動きを、制服の青年は怯えるでも逃げるでもなく、やはり変わらない瞳を持つて見つめていた。

「なるほど、身体強化系のウイレースってわけか」

「冷静に分析してんじゃねえ！ 逃げろよ！ 今からお前の体は俺の体当たりでぶつ飛ばされるんだから……！」

男はなおも走り続ける。制服の青年との距離はおよそ10歩、5歩、1歩……そして、今までに強靭な肉の塊が衝突使用した瞬間。

「……アガツ……！」

肥大した青年の真から出たうなり声を皮切りに、まさに寸分の差もないほどに密着した状態で、男の疾走は止まつた。いや、止まつたというわけではない。故意に、止められたのだ。制服の青年の手によつて。

「……説明どうも。お前の行動は悪くはなかつたんだがな。少しだけ、読み違えていた」

「ア……ッ？ 何を……だよッ……？ てめえの能力は……治癒で

……だから俺は最初に氣絶させようとした……」

「セイだよ

そう言つた青年の手を良く見ると、彼の両手は肥大した男の心臓へと添えられていた。けして掴むでもなく抉るでもない、ただただそつと添えられていた。

そしてもう一つ。彼の両手に燃え盛るのはやはり先程と変わらない緑色の炎。青年は両手を動かさず顔だけ上にあげ、もう一度説明を始める。

「お前が治癒つて呼んだ僕の両手の炎……ウィレース。あれは細かく言つと治癒なんかじゃない。僕のウィレースは……“促進”だ」

「そくし……グツ！」

なんとか言葉を発しようとした青年はもう一度うなり、必死に痛む心臓を抑えようとする。が、彼の両手は心臓に到達するまでに制服の青年によつて阻まれてしまつた。

「動かすなよ、痛むだけだ。……促進つてのは何から何まで、この炎で触れた物のスピードを上げることができる。さつきの銃弾の傷も、僕の自然治癒力のスピードを速めただけに過ぎない。そして今は、“お前の心臓の成長スピードを限界まで速めている”。この意味、分かるな？」

「……！ わ、分かつた。やめる、やめるから……離して……くれつ……」

「……よし

制服を着た青年は両手を離した。同時に緑糸の炎も消す。  
そして青年は顔を一度だけ叩き。

「……ふう！ 『めんね、身体能力強化系の君！ 手荒な真似をするのはちょっと苦しかったんだけどさ、仕方ないよね。僕の平和委

員としての役割だし！だからさ、ここは一つ僕の顔に免じて許してくれないかな……。ね？」

「……え？」

変わった。

その一言が簡潔にして、最高に当てはまる言葉だった。妙に眠そうな目で威圧してきた制服の男はもういない。代わりにここにいるのは同じ制服を着た、全く同じ顔を持った、別の誰かだ。

それは、突如訪れた明確な変化。まるで別人がいるかのようなその変化に心臓を抑え続ける男は呆けた顔を見せた。

「？ ああ、そうだね。自己紹介がまだだつたね。えーと、僕は……」

そうして変化した青年は制服の胸ポケットから一枚の紙を取り出した。パソコンで打ち込まれたのであろうそのきれいな文字の列と同じ言葉を青年は言った。

「ウィーレース対策学園たつた一人の“平和委員”。ウィーレースは促進、そして応用しての再生。名前は再興要。よろしくね！」

「……あ、ああ」

男はただそういうしかなかつた。

戦闘していた時の姿とは全く別物になつた、どこまでも異質な彼に対してただただ唖然とするしかなかつた。

戦闘と日常をスイッチにより変化させる一重人格者。それが“促進”のウィーレースを持つたつた一人の平和委員長、再興要の正体。

「？ どうかしたかい？」

【1】 たつた一人の平和委員（後書き）

閲覧ありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3373ba/>

---

再生能力者は岩をも碎く

2012年1月8日22時52分発行